

聖書 ガラテヤの信徒への手紙2章15～21節

15 私たちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。
16 けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。17 もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努めながら、自分自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者ということになるのでしょうか。決してそうではない。18 もし自分で打ち壊したものを再び建てるのであれば、わたしは自分が違犯者であると証明することになります。19 わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。20 生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。21 わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

説教 「キリスト わがうちに 生き給う」

◆わたしたちの人生に、いつ何が起き、どのように変転するかは、誰も予測することはできません。しかし、何がどのように変わるとしても、何がどのように崩れるとしても、決して崩れないものが、ただ一つあります。それは、「キリスト わがうちに 生きたもう」という事実であります。そのことを使徒パウロは20節において「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」と言い表しております。この事実は、たとえこのわたしが死ぬとしても、滅びるとしても、微動だにしない事実であります。この事実こそ、神様の恵みの賜物としての永遠の命であります。永遠の命とは、この私の内に生きておられる十字架の主にして復活の主であられる主イエス・キリストの事であります。私の内に生きてい給う主イエス・キリストが私の永遠の命であります。

◆そして、このわたしの内に生き給う主イエス・キリストは、この人生におけるありとあらゆる試練を経験された御方であります。弟子たちに裏切られ、無実の罪で十字架にかけられた御方であります。その御方が、この肉なる人間、老いて、崩れて、滅び行く他ないこの私の内にあって、このわたしの全ての経験を、わたしと共に生きていて下さるのであります。これほどに頼もしいこと、嬉しいことがあるでしょうか。これほどに喜ばしいこと、幸いなことがあるでしょうか。ですから、永遠に真実でありたもう主・イエス様に伴われる私たちキリスト者に優って幸いな人は、祝された人間は、この世界の何処にもいないのです。

◆私たちは今年の復活節において、マタイによる福音書の末尾に記されている主・イエス様の約束の御言葉を聞きました。「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなた方と共にいるのである」と約束なさっていただきます。それは、この私を前から後ろから、上から下から、包み込んで、共にいて下さるということであります。しかも「世の終わりまで、いつも」なのであります。時間的にも、空間的にも、天と地の一切の権能・権威を保持されている主イエス様がこの私と共にいて下さるという御約束であります。その主イエス・キリストが、この私の内に常に、永久に生きていて下さるのであります。

◆更に、今日の箇所においてパウロは、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」と申します。この私と一体であって下さるのです。しかも、それは「世の終わりまで、いつも、すべての日々において」なのであります。このような存在が他にあるでしょうか。しかも、主イエス・キリストは、あらん限りの真実と愛と恵みをもって、私たちと共に、私たちの内にいて下さるのであります。

◆20節の後半において、「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」とありますが、この「神の子に対する信仰によるものです」は「神の御子の真実によるものです」と、端的に訳すべき表現であります。また16節の「イエス・キリストへの信仰」と「キリストへの信仰によって」と訳されているものも、それぞれ「イエス・キリストの真実」「キリストの真実」と直訳すべき表現であります。そしてこの「真実」という言葉は、絶対不動の真実であり、恵みであり、御愛であります。「絶対の真理」と訳してもかまわないのですが、この私たちの真実でも、信仰でもなく、神の御子・主イエス・キリストの真実であります。

◆わたしたちは、「十字架上の七言」において、あの犯罪人の一人が「主よ、あなたが御国の権威を持っておいでになる時にはどうかこの私を覚えて下さい」と懇願しましたのに対し、主イエス様は、「あなたは今日、わたしと一緒に樂園にいる」と約束されましたが、それは今日の箇所におけるパウロの表現に置きかえますと、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」との意味において、言っておられるのであります。何がどうであれ、主イエス・キリストが私の内に、そしてそのようにして、私と共に常に、永久にいて下さることこそ、樂園であります。正に、今日、主に真実の故に、私達は樂園・パラダイスに居る事を許されているのです。しかもそれは永遠にであります。

◆ヨハネによる福音書の11章の「ラザロの死と復活」の記事の中で、主イエス様は、「私を信じる者はたとひ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者いつまでも死ぬことはない」と、ラザロの姉妹マルタに仰せになりましたが、主イエス・キリストが我が内に在りて生き給うのは、常にであり、永遠にであり、我が内にであります。このような絶対的な約束をわたしたちになさって下さる御方は、主イエス様を除いてほかにありません。

◆前回も、新約聖書27巻中13巻が使徒パウロの手紙であることを申しました。それは世々の教会が、そして世々の信徒が、自らが経験している信仰の幸いを、使徒パウロが代弁してしてくれることを認めたからにほかなりません。パウロは、コリント前書の13章において、「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。この内で最も大いなるものは、愛である」と言っておりますが、それは、「真実なるキリストが我が内に永久に生き給う」と云うのに等しいのであります。キリストの御愛は質と量、時間と空間において、無限なのであります。

◆実は、今日読んでおります、このガラテヤの信徒への手紙の2章19節・20節は丹波恵先生の愛唱聖句であります。そしてまた丹波昌子先生の愛唱聖句は、ローマの信徒への手紙8章32節～35節です。『教会創立125周年記念文集』～教会との出会い～に記されているところであります。昌子先生の愛唱聖句をお読みしますとこうであります。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありません。だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができますよう。」

死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か」とあります。私たちは試練を避けることはできません。しかし、真実なる主イエス様は、この私がいかなる試練の中に在る時も、共に居て下さるのです。

◆主イエス・キリストの命がけの御執り成しは、父なる神様の御心なのです。「32わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。」「34だれがわたしたちを罪に定めることができますでしょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」「35だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」

◆今日のガラテヤの信徒への手紙とローマの信徒への手紙を合わせ読みます時、御独り子、主イエス様をさえ惜しまず賜わる神様は、わたしたちを徹頭徹尾愛し抜いて下さるのです。私たちは内から外から、徹底的に、神様の限りない御愛に満たされていることを覚えます。いかなる感謝も、この愛・アガペーに報いることはできません。ただただ御名を崇め、讃える以外にありません。いかなる試練も、私たちがキリスト・イエス様における父なる神様の御愛から引き離すことはできないのです。何という幸いに私たちは与っていることでしょうか。主イエス様の真実によって与ることを許されているこの幸い、祝福を、永遠の宝として、日々、信仰から信仰への道を共に歩んでまいりましょう。

◆お祈りいたします。主イエス・キリストの父なる神様、あなたの御愛を覚え、心から感謝いたします。あなたの御愛に比べえるものは天・地のいずこにもありません。あなたの御愛は、私たちの内に満ち溢れております。わたしたちを覆い、わたしたちの内に満ち満ちています。その事を新たに覚え、心から感謝いたします。あなたはこの御愛を、すべての人に漏れなく注いでいてくださいます。主イエス様の教会である、私たち大阪北教会が、そしてこの教会に連なる私たち一人一人が、御愛の生きた証であらせて下さい。この感謝と祈り、主イエス様の御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。